雀子集　一

寛文二

へ別 5
1966
1

寛文二年　銀竹軒光方
撰
俳諧作者名寄ヲ以テ按ルニ
光方ハ山本西武門人ニテ京
都ノ人也

文政四年辛巳夏五月十四日
深川八幡一ノ鳥居辺星店ニ
得タリ價僅ニ一銭目
反故ナル事ヲ幸ニ購ケルハ
此書ノ高運也
東都　山下隠士　柳亭種彦誌

夫連歌ハ哥より出て哥
よりもいと殊にめつらし永きを
求むれはかならすしも
有さまハ誹諧となりよ
りも此道世に弘まりて其名
もえたる其の世山崎乃法師ハ

中ころいつの比とはなかりけん
洛そとのほとりに帰りすまゐする
そのいろし比よこの中へ
家咲花二もとありて其の
ぬくはもとより野ちの雀
まてもかゝる所にて絵はし

みなかれてはてて其後も哉
しるしなるを有
すなはち人間生死の松
ある世阿弥陀仏まさに付て
ともし
去る程に又其ころ雀の子

本地寂性佛りまへといふ金
月のひかりあまねくやすらかにおもの
是阿弥陀佛なりとかゝれたり云
鬼神なりともかんせ世音菩薩
是なん釈迦如来なりとまうされ
以下ありしのこゝろをまかせ

清のまほりてゝ神神社
かいわもかをひいゆきの弁
だしみあみかおもひ申給
ゆゝそゝしいそのみかめ
くえいひはれこゝろ小一とせ
天の下おさめてかきしは

あき人のうらうり
ことのはあまりに名をたかうして世を
ちりぬるはいつはあはれなりし人のう
のちよみくいのかきれハ二位天
あかしこのうらの宿にとふらひて
同物語に代々はまゐりけるとかや

玄也人こそあひおほく人の
まことやさるは武人の連歌に
寂蓮ハ松の葉をすてゝ家の
とかくすゝめられしかとも
あやしの武人赤衣去て
國守いらのとれ

かゝる世の中のこゑハやさしくきこえけれ
かくあら〳〵人ハほうしハ親ハ我の
ことにてまうされいとけなきを
あひて帰國まし〳〵てかうまう
みちあれとわさとおもく壽画祝
月うへ、又さ清き、ときハかりおほく

あけて世はへよろこひ給ふ
さら純にようまうてはつねにかへし
ま〳〵とまことに逢けれは
月のうちに出家有供にまきを
こゝの里にしめかさね力み
二三度さま京田舎うけて

もしあらましかはとにおもひ付て
やりつゝとくまいれと梅か枝は
時鳥あらしめ若君はみあく
ちるもいまあそふれとかくらく
かくかきまいらせ候へはまゐれ
寄れさうらふまゝにゆひさし

誠ちくらやいつまれ人は
うしろめうしろすかのみち
こさまつきも好きあしきあり
みはあまりにくかりたまへれ
あらくもやまえ付きは何とか
きよろく川のあさくまさらん

みてし人たれかみなかへる
海のそこかけて面白けり
ともを身にみなれよあらん
難波のうらにかくみてしらし
あはちのそら付る
二ほの梅の鶯みなくるの音

つゐみちしてかひしれ
ひなそもすつゑ桃桜
花よと名になくゆくま

郡竹軒
光才

雀子集巻第一目録

元日　氷様
卯杖　腹赤
子日　綱引
若菜　左義長
踏歌節会　春月
春雪并沙　霞
鶯　春雨

正月
若松
初午
梅花
[illegible]
柳

雀子集巻第一

元日

國のまいうらや絶てこそあれのうれし（？）　明心居士

溢觴もなれは諸き千代乃春（？）　野々口立甫

今朝はまさ出徳ありまれ也（？）　正法寺成安

よしとえてゆてたゆりゆくかへ風

堺永重

それ共こゝれゝそとまさしつさ郭

堺成元

家くれ出絲よきゆき門松

元日よ夜ゆりゆくにつゝまる

摂州白江白玄

あまはる宮まゝ露つゝゆのせし

村山栄信

庭訓の文れゝしゆんゆくかな春

本國寺室雅法師

暮端やうらなか絲てときとしの際

親應法師

あゐくゐなさたつゝいゑみやは茶武

六條尚女

出る絲のさ天れゝるやれらすゝみすみ

道春法印

さていくのみくみれよき具足餅

明心居士

今朝ハ百八十年をむかへけれ

六條尚女

此比(ころ)老代く不領ほん田うら

奥州會津智鏡

一年を一秋ニこえてやりさり行

一歳

和生の陽よりかゝる開けん李

摂州保友

鷄旦や高(かう)麗(らい)までも乃おさい代の春

同州宮田義文

都の春よそしぬてあひたる

つりまつりたる

秋度はさてはてのこそしれ

朝江一風子種寛

篠竹のあハたちてぬ春立けれ

堺　正重

あら璞とうくまきれこそしけれ

沢　貞

千年もみどりれまさと松かざれ

勝春

元日やぬれそすりしそう男

安松祈

一月ハまさらしくなる旦かな

赤坂定信

淀ゝくまとゆつり都やつゝ雪

堺　重利

まさのほりやまいりて見ゑてこころあるか

作者不知

月よこれ年れ跡しかとゆくれ

ふりつゞきそねたみや見え之餅
本國寺室雅法師

黄鶯辰よありける
寂光寺泰真

まうゝもおかやこの花飛ひさき
ほうらいのまねやほうらう初
六条尚女

えまやさへ出たなまかのやそうれし
雲閑法師

困りゝつるいねや絵そてさらりきう
伏見一盞法師

正月やお礼と申さし絵の花
堺宗信

弓れつるいまをとるへき射そ絵へれ
小山成次

からうつてこえいちれ出ようけれ

熊谷倭貞

千早古ふしとゝえてや神乃春

坪川尚氏

四方にむかふ南面やひしのし肴

正栄

さうしくは春におひてのうしりれ

貞紀

鋭てうしとどう賣よ寸ろ合わ哉ひ

中村正近

かざり竹ハ千歳のちゝめるからぬし

武氏宗家

入口の家のしらやかれ松竹

忠清

あらたまやかさり松にもてもらひ

前林見笑

かざり竹やされたらぬのしるし哉

門に二本そてかへしや松林
本松軒

十ミ十や給へてさかるれしされ年
西洞院喜氏

出初は給へてきりの浅黄式
久松

初のりのめつらしき夜やうしの年
喜氏

和哥の名やよむ人しれすわか水
伴哉氏

初のりはよる座敷なしうしの年
春氏

門に松やごさりたまれのとしの中
正武

ちゑの矢といへ大ひのゆみはしめ
勝吉

うれしさや年徳神ぞ礼智信
杏杉軒

元日や文字もてわたす宮[illegible]

泰春はうん楊弓ぞ弓かし哉
坪川當氏

去年の家よおもひそめやかれ杉
橋本清安

福ごくやなかうもうふるうれしし
片山貞政

算盤の珠数よいくへ三ケ月
勝春

すゞしれ家や詠草(えいさう)よれ神乃春
喜氏

いもうしらいふ雑煮(ざうに)やよない辻
かさる行もめしといふやおやこ草よ
番井正之

うしろ面のすゝはき夜ハさかりけれ
正武

大晦日ところ〳〵やいへくるらし
堺成元

霰(あられ)おとさいこうをころやいろんぬらし
信房

双六れ世ハさいめんやいちめてき
非京忠清

万代の春こもまうやゆくふるき
中村正近

矢車(やぐるま)やうしれ年始のゆるくしめ
藤氏

○正月やめくさまてしまさきはう
前林見笑

ほん田まゝいちへ六十六ケ国
正武

母衣味噌とつけてやいたふ具足餅
墨田勝長
まくりやくねをれるすのとられけり
江州宅仲
こゝろむる筆まつりは旅や吉書そめ
宗吉
正月ハうるさかしこ祭のとくとられ
墨田正長

商人のいはふうりかい旅んしれ
浄以
まれ多めいのまくれりけ吉出そめ
大津是雪
父母のえんりやこそするそみから
正勝
正月閑ありけるかな
まつりちやひとつきおほさうし峯

ぬうきてみなそこにうけて之方かれ
作者不知

ゆふられくさきりや引姫小松
信州西悦

はいさら共たえぬ川のけしめかな
賀州正種

花えひいにうけんてふやよし着
江州吉文

又こうし帽子やそらにうつるひく絹
岡田勝長

堺安信

いよしへのぬめをとひくやゆきらしめ
都範

さわき草れざうるやわすれぬらつれ共
井関作

さひらさいちへさんらいひしれぬち

二なしや堯王帝舜の代々の春　本杉野澤

大みそかわかぞていふらやはされ　長氏

年九矢とまへぬこすや弓うしめ　本杉軒

春きけや仁義禮智信三ケ日

よいうりとうさりまでや　軒千七信ま

見ゆるなのくいきひろ

くふさのふおとこひいさふや三ケ日

さされいしるうくいろんる世風春　如寛

君か代やまいすくよいのさり行　因鴻勝重

春きくくるみのくまいわりきれ　清安

かくさりや一まう二夜せ三ケ月
正栄

暮れ口をちよりといふやけ青
堺宗永

天下まゐるをいはにぬれ松
なお軒基氏

賤て切売やちつてちらさ
更級ゑ（え）おかなれやきぬ

月前と一ゑねをもりしやあち
堺永政

そこれのそしぬかりかる
奈良基氏

そかめやあの松根ちふ紀花
井関作

くそく餅かさる武者の山かされ
松永敬則

佐保姫の兄とやいはん太郎月　井関作

黒衣ぬれしぬいとろう年始礼　西洞院長武

太郎月の名やしめぬいのかさねかな　小山成次

許の芽や花の三郎まちえたり　西川宣種

白むらひいかやひしりけれ　堺三治

数とゝめてかゝみの茶せんれ　摘正次

うしろくやまゆるへしとの一年始　勝春

出初や筆もおしましこれそし　堺永之

さくらて侍らしてたりさはこゝ
若林見笑

神も人も身といふかり花ざかり
黒田勝長

八重てもひとへにみゆや滝桜
堺宗信

年こえてうつれくの試業かな
武列有若

出るも花のかげはこそ何乃花
静貞

花ちるやゆふ雲ひとつ風しら
船江将寛

一

門松ぢふ二ツ字弦（かし）や文字なり
宇津宮豊田重政

そゝく菊よりたる

花の春も若てさそとえ方礼

堺正重

椀のうちは吉日よりも賞翫
安平貞長

去年からみふたつの巳の年始哉
茨林是笑

おさまれる世のこゝろや具足もち
池鴻成之

かざり縄や末の代の道よくしれる
熊谷依貞

むかしよりかはらぬ松や万歳
外本光根

春の日をとりさかへきこえあれや
熊谷依貞

たかくにさへとみよまくてられ
杏松軒某氏

出初や文殿の記おもりのしるし

冬かれておもふ巣をかくるや酉の時
丈帰るこそ凸凹乃文字よめくらめ
墨染かはものてつけゝる者書れ
朝江種寛
鶴松とはふめの子をとりつけ給
冬人かいまひの雅てし
字号
鶴松といふ二千年始の郷

伊賀浄蓮寺知覚
数れぬ御恵とゝく作絲娘御
伏見一盞法師
梅乃暦みてうるひもやらひ初
坪川尚氏
よろもひるいろみつまきれすゝき
堺梅女
ゆきのれあれとゝる茶の湯哉

拯女

順礼のめらはまくらきや門出られ

若山常盛

まゆくいつ雲の風雨とし紛れ

家緑

門口はこ川や出いるつくれ杢

伴芳氏

これはさんとさくさりやとさ年

伊賀浮蓮守如覚

もろこし山や粉の雪ふれとは花

奥州會津智鏡

屠蘇酒の肴はいとゝ茄御かれ

小谷季茂

春月こそなつ艶たれやとは風

元日としくるつはされん四方とい

堺栄方

ゆく年の行くもむかへて鏡哉
堺 安信

おさまるや天かしたなる御代哉
花の春やけゆへてひらくかゝみ餅
堺 宗永

松にこそやはらかとくるひ初
花やねはまくりてひらくなみ哉
村山 宗信

二葉よりや和光寄る神乃春
若山 光成

さほ姫の花あるうちはさゝら霞
宗信

試むる詩人哥人屋らにゝ集
山中 道可

千年いさへ毛名はちゝねかさり竹
不知作者

うれひ初や我おもふ人の釈迦流
井上友之
当方ゝりかれくりの年始れ
範治
まつのとをむへ志ゆうせん此御亭か
作者不知
たゆうやむかしそうしとおもふ
良次

我はおもひそらしもたるおりのしに
橋本勝春
かつきりや一文ふ銭の神乃光
中尾安久
元日山とやかれも元日をわ見えなるも
道能
屠蘇酒もうつゝの花もわかの年
良次

あつさをもめてまつりしそむる掤（たゝく）
山中道可

大海へやめていそれりゐ宿の春
三刋吉正

上手にてふれもや湯絶て鹿茸さし
作者不知

有髪もくろむすゝや手ならひ（まと）
三田村泰次

春の鞠とおもふ絶よなゝやりか縄
堺之治

あさいかりつゝけもせ屠蘇の酒
堺宇野宗伝

里海波しつれうめへらさひめ
堺成政

逢坂やめでまけしつきりにする識筆
堺一雪

唐の字もしくそゑつさ筆たての
播州細丁野次

さほ姫のみそりにするや猫柳
堺貞盛

あらたまや二年ふりくるふれ毎
播州久任

鴫入海ふ川しいますなり代々雲
堺松安

字ねもよまこゑむすひあしと風
上京如鏡院月如

のりれいやちつや雑煮のちうくい
山城西武

手すれ子のそりにほうやみちなり
銀作彩光方

何よ氣のちつくもなしむれ雲

字のうへよ出八朔のちうくゑ渡り

羽招

卯杖

昔日や分剣めつきひのぬかし
池鴻成之

鬼門をなをしぬらしとし卯杖かれ
坪川尚氏

天のしかまつさていちの卯杖れ
越前宏治

第二十三丁欠

初春のちりねのふやまこらし
陽靈

杉野月潭

うしとねの文へまいりて日得
あらしとねのひやままて緑まいり
三宅宣義

初つまとくりてひくれねのひ引
當田氏

松代よりいくやあまつゝや子日
鈴江宗寛
ひきこしやあちひ子見れあまり
縲引
貞純
大はなをひくことハ名のしれあまり
中村正近
あつな飲内な覧てまろふ子さそ
ゟ紀

若菜
ねこしく ねしきるやみ行草
浅紡
江引与鴻理会
七ケ道みちて いろゝや七草叢
本國寺空雅法師
いつまてもありくくきよおや仏性さ
月別我文

おもへとや清水さしつの佛のさ
秋若貞純

思ふやへのつまてとくまられ弘
山瀬一要

消とけてくるありくされ枝
前田正武

うるまえ思ふをさやはけ風
武則光吉

きしよう後の迎へハなひかまつり
高松行

つむしやれ物への雲をてなられ共
六波羅まて行

行よてつしや六ところけり
中村正也

雲ととえとも聲をとこえまし鶯れ
神原忠清

七夕やてんく天にまてとゆ
堺 正重

此はまきへえ絶めうやこのせり
堺 谷永重

さらさゆふむまや雲にかけつれ
奥 良兼松知鏡

年とえてめかれれたえたまれかな
依菜ちゝ長

花菊長や今釣残のくとあし松
堺 宗永
堺 重利

花乃月の光かりまるかるや花菊長
坪川 當氏

神代より月なき武列 花菊長氏
友松 引

花かこれよつ七ころやれ菊長

花ぞ去るかんかしお手すみとまる
蹈(とう)分(り)　越前府中

あつまりしつまりしも路や西武足摘子
去月

梅の花やあふしをとおる子　堺成元
勝月
友松軒基氏

三月八月扇までとや如何雪月
すゝきをうはちも丸さや　勝月
去雪か

消えるゝ雪やまるゝれとれね
鯛江時寛
若林見笑

春は初すきあれなしゝうさや川
友松軒基氏

厚くなるあつくてとるかうれ

霧

塲成元

とかくして見れ霧やとけのく

春杉朝基氏

袖くるゝかりすゝのころかれ
杉かかりよりくるゝすゝやさねかと
うすすゝき見えしにぬれせさ

十かまよりかやかすゝのまとり海
太江山いくのくねそたうりに

中山宰相雅涼卿

津いとつぬゝすゝのきぬやとやらん

朝江經寛

朝きり神乃むかへのひとゝに

如宣

生城いらくはえはくしりゝすゝ花

中村正近

虹のたつやまのすそのゝむらしくれ

小谷季茂

まるんよりこかけもやまゝねひかく

堀掌言

君か代はなかくも數たえふせれ

光絶

なきまくらしはのあらしのふくそのひまゝ

鶯 上

江引忠之

あさしひきひとゝまきれ肉ゝれ

伏見懸聴

いつくらのなかき年をや含春鳥

奥君部繞

鶯のなきてのおとにひとそれ

春の谷よまよひて侍る

うくひすもなかむとき谷を初音かな
宗円盤堂

鶯乃なきこゑや花のひもとき
西村貞基

鶯はけてうくひすとれぬ高ね哉
伊藤可徳

梅か絵よむかく鶯やかはらへん
甚氏

落梅よりうくひすや声をとよまいと
かきりやよまりて行
久松

色いくかもかけるや家の舎夜鳴
前林良笑

うくひすは一季ひと句と一鳴れ
如雪

梅やまくらうくひすやすゑ一ねかり

花のかや鶯の声吹たをし　中林宗惠

堺成之

うらみすれなくもつけても出るか　銀竹軒光方

奥(おき)風のとこま吹にし含衣る
春雨　奥州如清

春雨はわれまちかせん花衣ね　堺定正

花さけと天下つゝ山春雨はたゞ　本松野基氏

咲花をとりよ恨そ雨や知音かり　奥州會津養元

春雨やとくとふりしきやれ山　堺方由

春毎乃かはらぬものをちるくつきり
木月

姫すゝの木乃花の雲やひいなき
那波基氏

花のやまのもふ木はあゝやましや
堺律宣

姑りめ雲志ほしさ木はあゐ
大坂内江向云

梅花

春とふつゝ桜のまれ盛さかりし
東六条常女

おりゝや匂ふて小梅の花さうかな
奥州知徳

小山成次

けさうきつ詣ふ天神こゝう梅花
安川盛重

木の目よもつりりをするや子もち梅
重直

浮れいぬきてこれ鶯梅
小西治重

うらひとや妙法橋の論古梅
高谷吉次

伽羅の香よ似ていれんとうる梅花に
入川盛重

難波津は梅さくやこれなおわかれ
清心

春や梅未だとすくくく梅暦
小谷季武

論語梅のつゐひは花のまんかうれ
松利

論語梅のみちの家いせんしゅ
中山成次

花れ見つき使んとさせなだいかり
西洞院久松

うらそて梅やたゆらん川のまちらさ
なれ折基氏

一ふしや花のえんまうつゆん一枝
見えてこくうにまあるつや梅こよみ
こひ梅の日いよく縁しれとよ見ん
出しよめさたまうけよ梅の花さかん

宿の花またとてゆうすゝや梅こよみ
井上重知

ちくとかり寂よ咲けりさ花たん母
宗応日正

とのやいそそ春つけ吾れたちの口
伴蛇浄蓮ち知覚

梅ヶ香やうぬ手をかう風たる節
若山光成

よそやうくそれ見しらぬ梅の花
吉田宗八氏

花乃なさけはむかしもむかし梅津河
朝江維寛

花ハ目につくしぬかるゝ老後梅
東六條活卿

春霞や紫までちらつ絹香梅
銀竹軒光方

宇治の歌書よまれてつゞく
まつらし

歌音のちらしや永井信濃梅

若松

まれむのしけりけり松のみどりや
安松判潭

綾小路正室

みどり色紙松をいはゐ松かな

御忌

御忌のうちつ念仏や百万へん　雲閑法師

なかれ汲て御忌とそうつ梅の[illegible]　在松軒

初午

初午はあらいひゆかやる子共哉　西洞院正武

初午はよかゐまいらしはさかりんかれ

柳

折ゑには燕子おそるる柳　村山掌甫

細縄や糸よりかくる柳哉　堀方由

根とおやとよ色し柳みとりすな　伊賀知覚法師

萩林見笑

きくらふよみすゝて鬼さかり柳
神原宗清

のきにはきゝ子ゝもまろふ柳かれ
小山広次

みこれはあそは柳乃かふかれ
正武

柳りみゆみさわくまて辻ぬこ

猶白次

あられさ老ぬいまて川風かさ
奈良村某氏

新れつまくろふ柳や下たるき

錦世よりれのとゆそゆへ柳かみ

姥柳よかゝる みすゝてゆきかりし

のきうりもらくいつやらふ柳
田中宗魯

柳ゝみとゆふゝ雨とくし沙ゝか　陳厳元

夜ぬしさや雲津よあらか　柳橋

一ノ下